

しんきよくたかおさんげ

新曲高尾懺悔（しんきよく たかおさんげ）

〱ひとたび清容を見て そもんに叶い またある時は声を聞き
愛執の心いと深し 〱そつと素顔の流し目に 馴れし廓の八文字

〱松の位に柳の姿 梅が香とめし 後朝も

〱まだ覚めやらぬめくめ鳥 雪の明日の白無垢は

消ゆる思いとなぞかけし 〱心の丈をいうならく 奈落の底に入る時は
えんぶの昔なつかしく これまで現れさむるうなり

高尾「申し もうし ご出家様

道哲「ハテ 合点の行かぬ誰じゃ 誰じゃ

高尾「ここじゃわいな

道哲「ヤヤ そなたは三浦の

高尾「アイ 高尾じゃわいな

道哲「南無阿弥陀佛 南無阿弥陀佛 々 々

高尾「六道四性の巷に迷い 浮みもならぬ 我身の上

頼兼様が懐かしいわいな

道哲「不憫やな 喜怒哀楽は人情の常 勤めのうちの憂さ辛さを
何んと話して聞かせまいか

高尾「サア私もお話申したく 是まで参りましたわいな

道哲「サ その話は

高尾「アイ それは

〱恥ずかしながら川竹の 憂きふし繁き中々に

〱年があいての楽しみは やがておの字の名を嗣いで

〱二日酔いせぬ身とならば 素足も野暮な足袋になり

つめるを常のこの指に 糸針もちて物縫いならい

肌着仕立てて きせてみて

殿御のたけに 眞実が 届かばほんに 嬉しかる

そうしてこうして どうしてと 俣になる身か 何ぞのように

〱別れの漣の うたかたも 哀れはかなき身の上と

〱涙は袖にまきの葉の 露重げなる 風情なり

道哲「南無阿弥陀佛 南無阿弥陀佛 々

とてもの事に懺悔には重罪も滅せると言えば

ありし廓の事どもを愚僧に話し召されぬか

高尾「さなきだに女は五しよう三じゅうの重き罪

それさえあるに小夜衣 我夫ならぬ 重ね褌

偽り飾りし身の罪をそならお話申しましようか

道哲「罪障消滅のため詳しく話して聞かせ候え

南無阿弥陀佛 南無阿弥陀佛

懺悔に罪も消えぬべし 懺悔に罪も消えなんと

露のこの身を草枕 夜毎夜ごとにかわりゆく 昨日の逢瀬
今日の淵 濡れて寝る夜のささごとに

笑つてつらき 日もあらば 甜泣いて嬉しき 夜半もあり

蚊帳よりそとに 紙一重 まかせぬ身とて 胸の苦を

言うにいわれざ ぐるぐる巻きの それその文の数

届いて明日の仲の町 客を待つ虫 あきつ虫

主を待つ夜は人こそ知らね 夜着を枕に 鈴虫なれや

我も虫には あらねども 御葉殿恋しと草葉にすたく

憐れともふびんとも 言すべき人面影も

見えず みえず算木の

無残や高尾は世の人の 思いを賭けし報いにて

罪障の雲たち覆い めいめい もうもう ろうろうたり

修羅の太鼓のうつつなく 早 時来ぬと夕まぐれ

こは口惜しや 浅間と 立退けば又 行先に炎々と

焰に苦しむ身の劫苦 獄卒 悪鬼の苔に打たれ

山に登れば剣に貫き 谷に沈めば紅蓮の氷に

白無垢かえつて唐紅 血は瀧つ瀬谷酒の波

嘘の涙は 焦熱地獄 仇に誓いし 誓紙の烏

くろがねのはしを鳴らし両眼めがけ飛びかかる

追えど はらえど立ち去らず ふるい戦慄きたしたしたじ

追い巡り手くるくる繰る 苦しき思いに 魂きわる

道哲ここぞと念珠をもみ 南無廣大観世音御あみりた

ていぜいきやらうんそはかと朝日の弥陀をとなうれば

野分け夜嵐目前に たちまち紫雲あいたいし花ふりかかる

法の庭 紅葉の塚と夕映えも 代々にその名や残るらん。